

天沼中だより

令和2年12月4日
杉並区立天沼中学校

<http://www.suginami-school.ed.jp/amanumachu/>

子どもたちの健やかな成長を願い

校長 水野 英利

新型コロナウイルスの感染が拡大し、危険な水域に達しつつあると言われています。特に重症者はこの2週間で倍増し、春の「第1波」のピーク時の1.3倍超。このままでは救える命が救えなくなる恐れがあり、自分や自分の親しい人が、いつ当事者になるかもわからないことを考えれば、一刻も早くこの状況を止めなければなりません。

学校ではこれまで通りのマスク着用や健康観察表の提出、手指や校内の消毒に加え、暖房を使用しても窓や扉の一部を開け、風の通り道を作ったり、登校時、教室に入る前には学級委員が呼びかけ、必ず手洗いをしてから教室に入るなどの取り組みをしています。家庭内感染の割合も多くなっているようですので、ご家庭でも一層のご注意をいただきますようお願い申し上げます。

さて、先日、文部科学大臣より「児童虐待の根絶に向けて～地域全体で子どもたちを見守り育てるために～」というメッセージが発信され、配布させていただきましたがお読みいただけたでしょうか。11月の児童虐待防止月間に合わせ児童相談所の相談件数が増加し極めて深刻な状況にあることからこのメッセージは発信されました。

保護者、学校関係者、地域の皆さまへ

「児童虐待の根絶に向けて～地域全体で子どもたちを見守り育てるために～」

11月は児童虐待防止推進月間です。

子どもへの虐待は、児童相談所の相談対応件数が増加するなど、依然として深刻な状況です。今般の新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響から、生活不安やストレス等に伴い、児童虐待のリスクが高まることも懸念されています。児童虐待により子どもたちが傷つき、亡くなるようなことは、何としても無くさなければなりません。

虐待は、殴る、蹴るといった身体的虐待だけでなく、言葉で罵る、無視するなどの心理的虐待、子供を監禁して外出する、自動車の中に放置する、食事も与えないなどのネグレクトや性的虐待もあります。いずれも子どもたちの心身に深い傷を残します。

保護者の皆さま、大切なお子さまの健やかな成長のため、「虐待はしない」と誓ってください。子育てに不安や悩みがある時には、身近な人に相談したり、自治体の相談窓口等をお尋ねください。

学校関係者の皆さま、日頃から子どもたちと接する中で、児童虐待と疑われる事案に気付いた際は、速やかにチームとして対応し、市町村や児童相談所に通告するとともに、関係機関と連携して対応してください。

地域で子どもたちと接する皆さま、是非、子どもたちの様子に関心を持って見守ってください。日々の活動やつながりの中で児童虐待と疑われる事案に気付いた際は、最寄りの児童相談所に繋がる全国共通ダイヤル「189」（いちやぐ）に相談してください。

児童虐待の防止には、家庭・学校・地域が一元となって子どもたちを見守り、育てることが重要です。文部科学省としても、関係機関とともに取組を推進しています。皆さまの御理解と御協力を心からお願い申し上げます。

令和2年11月

文部科学大臣

萩生田光一

文部科学省 HP 参照

内容には、今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響から虐待のリスクが高まることが懸念されたとあり、不安や悩みがある場合は身近な人に相談したり、自治体の相談窓口を頼るよう呼び掛けています。

前述したように学校は今、新型コロナウイルス感染拡大防止に神経をとがらせていますが、一方で子どもたちの安全を考えれば、そればかりではないことに気づかされます。保健室に駆け込む子どもたちの悩みを聞くと、コロナ禍になって虐待とは言わなくても家庭の悩みを打ち明けることが増えてきました。

多くの場合児童虐待は家庭といういわば密室で行われる行為であり発見が難しいと言われていきます。また、虐待を受けていても子どもにとって親の存在はかけがえのないものです。親との関係が断ち切られる不安から自ら訴えることも極めてまれです。しかし、子どもが直接訴えなくてもSOSのサインを出すことがあります。学校で見せるサインには、保護者からの愛情を十分受けることができない反動として反抗的な態度をとったり、わがままを言ったり、逆に極端に甘えるように教員にすり寄ってきたりするなど私たちが試そうとすることがサインとして見られます。一方、お知り合いやご近所の方が気付くサインには「不自然さ」があるようです。不自然なケガ、不自然な説明、不自然な表情、不自然な行動や関係。親子が示す不自然さに気づくことが早期発見の糸口になります。

年々増加傾向にある虐待。相談を受けながらも命を失ってしまう例もあり、こうしたニュースを耳にするたび心が強く痛みます。学校は、地域は何としても子どもの命を守らなければなりません。「何人も、児童に対し、虐待をしてはならない」児童虐待防止法第三条は、子どもたちの健やかな成長を願う私たち皆の共通する願いが込められています。

いのちの教育

本校の特色として、毎年実施している「いのちの教育」。生徒にとっては重い内容にも触れますので、生徒によっては負担が大きい場合もあります。あらかじめ保護者の皆さまにも内容をお伝えして、配慮しながら進めております。

今年度も、1年生は「誕生」2年生は「がん」3年生は「臓器移植」を題材として講師をお招きしました。事前にそれぞれの学年で指導したうえで、当日を迎え、振り返りを行いました。



11月11日(水)

3年 臓器移植を考える【講師】 日本臓器移植ネットワーク 渡邊京子様

この花は生きていますか



当日を迎える前に、事前指導として各クラスで左のような投げかけをしました。3年生なので、「根がないので、生きていない」「まだ水を吸っているから生きていう」という、簡単なことではないという思いをもったようでした。以下、ワークシートから抜粋します。

「人間が活着ているかどうか。簡単なようで難しい問題です。

脳が死んでいれば人間は生きていないのでしょうか。

活着ているうちに臓器提供できるのはどの臓器なのでしょうか。

あなたが脳死と判定されたら臓器を提供しますか。

あなたの家族が臓器を必要な病気になったらどう考えますか。

…かんたんに『活着ている・死んでいる』と言えない『いのちの問題』です。

社会で議論や論争となっていることは、そんなに簡単に『答え』が出る問題ではありません。みなさんには、たくさんいろいろな立場の人の考えや意見に触れてもらいたい。そして、あなた自身にうんと悩んでもらいたいのです。」

当日は、「脳死」「心臓死」についてや、「臓器提供から移植まで」「臓器移植の歴史と現状」についてのお話をいただきました。そのとき、レシピエント（臓器提供を受ける人）として、ドナー（臓器を提供する人）として、自身が、家族がどう決断するか、我が身に置き換えて考える時間になりました。



☆ 生徒の感想から ☆

- ・いざ自分や家族が臓器移植と関係する立場になったときのためにいろいろ考えておきたい。
- ・家族や周りの人としっかりと臓器移植について話し合っておきたい。
- ・もつと臓器移植を必要とする病気について調べてみたい。
- ・もし自分の家族が脳死状態になったときに、臓器提供するか決断するのはとても勇気がいると思った。
- ・臓器を提供したり受け取ったりするのはそう簡単なことではないと感じた。
- ・自分は関係ないと思わず、しっかりと考えたい。

11月4日(水)

2年 がん教育講座

【講師】 国立国際医療研究センター病院 緩和ケア科医長 徳原 真 先生

昨年に引き続き、徳原先生に講演をお願いしました。身近な人が「がん」という病気になる経験は、現代では珍しくありません。その日のために、一人一人の命を大切にするための心がまえをつくる学習をしました。事前アンケートでは、怖い、ネガティブな印象でしたが、前向きな意識に変わったのがわかります。生徒の感想をメインにお伝えします。



<事前アンケートから>

- ・細胞のコピーが失敗して生まれ、体内でがんが自分のコピーを大増殖させて大暴れし、最悪の場合、死亡して、回復しても再発する可能性がある病気。とても生きるのが辛い病気。仮に治っても再発し、一生付き合わなければいけない病気。治すのが難しい病気。死ぬ可能性がある。様々な種類がある。病期に気づきにくい。髪が抜けてしまう。多くの人がかかって、多くの人がか亡くなっているイメージ。死んでしまう確率が高い病気。なかなか治らない病気。後遺症が残るかもしれない病気。進行している状態から治すのは大変だが、早期に発見すれば治せる病気。治りにくく、がんになってしまったら死んでしまうイメージが強い。
- ・一つの器官に留まらず、色々な器官も悪くしていく。転移する。つらい抗がん剤治療。薬の副作用が辛い。早期発見しないと治らない病気。危険な病気。再発しやすい。大きな手術になる。誰でもがんになる可能性がある。

<事後の振り返りから>

1 がんはどのような病気であると理解しましたか。

- ・重い病気であり死亡率も高いが、予防もできて、治らない病気ではないと理解した。
- ・かかる人も増え、身近な病気となってきているが、治る人も増えてきている。
- ・治る治らないに関わらず怖い。再発が怖い。命について考えさせられる。
- ・3人に1人がかかり、2人に1人が死んでしまう身近な病気。
- ・がん検診を受けて早期発見すれば90%の人が治ると知って、将来は絶対にかん検診を受けようと思った。

2 がんの予防のために、あなたはどのようなことを心がけたいですか。

- ・規則正しい生活と適度な運動を続ける。・過度な飲酒や喫煙はしない。
- ・バランスの取れた食事を心掛ける。食生活を見直したい。
- ・定期的に健診を受ける。
- ・12条を守り、がんについてもっと知る。さらに周りの人にもそれを薦めたい。
- ・運動や規則正しい生活を送り、大人になってもこのことを忘れずにいたい。
- ・受動喫煙の防止(とりあえずタバコはやめさせる)



3 もし、あなたや身近な人が“がん”になったら、今日学んだことをどのように活かしていこうと考えますか。

- ・励ましてあげることも大事だが、一緒に悲しんだりすることが大切と学んだので、そうしていきたい。
- ・患者の話をよく聞き、寄り添う。一緒に喜んだり、泣いたりする。
- ・正しい知識をもって、励まし過ぎない。
- ・身近な人が「私はがんだ」と受容してくれるようにサポートしたり、心の緩和ケアをしたりしてあげたい。
- ・無理に受容の段階に行かせようとは思わない。でも諦めさせるのは嫌だ。死期が人より早いだけだから普段通りに接したい。
- ・寄り添いながら、でも相手が不快に思うような過度の励ましはしない。
- ・共感を大事にする。
- ・生活・体・心の全ての面で支えられるようになりたい。
- ・“がん”という一つのくくりではなく「大切な人」ということに変わりはないから、その人に合う接し方を見つけられたい。
- ・一人にさせない。
- ・思っていることをため込まないように、話をしたり、それを聞いてあげたりする。自分にとっては助言だったとしても実際に治療している人にしか分からないことがあつたりして、もっと苦しめないように心がける。
- ・がんという病気のつらさなどを身に染みて感じることはできなくても、励ましてあげたり、共感してあげたりすることはできると思う。また、「頑張り」という言葉よりも、はげましの言葉を言ってあげたいと思いました。
- ・私がかんになった時は、驚いて冷静に考えられないかもしれないけど、ゆつくり受容できたらいいなと思う。
- ・日々の感謝を伝える。

4 「いのちの教育～がんについて考える」の授業を受けた感想

- ・がんになった人の死に立ち会っている現場の先生の言葉には重みがあつた。「正解はない」という言葉にハツとした。確かに人それぞれだと思った。
- ・今のがんの治療はロボットが担当することもあると聞いてとても驚いた。当たり前の日常を送れている今に感謝したい。
- ・もし大切な人が、がんにかかっても、生きていて楽しいなど希望が見えるようにしたい。
- ・実際にあつたがん患者さんの話がくつききました。がんにかかったら終わりというわけではなく、また再スタートが切れる可能性が高いことが分かって嬉しかった。
- ・医者のがんを治すだけでなく、緩和ケアをするなど色々なことをしていて凄い仕事だと思いました。
- ・がんになると体も心も苦しくなる病気で、がんになった人へ、話す方(周囲の人)もどうやって話したら良いか考えなければならぬと思いました。
- ・授業を受けたとは言え、本当の辛さは自分や身近な人ががんなどの重い病気にかからないと分からないのだろうと思った。しかし、そういった時のために、知識をもつことは大切だと思った。
- ・今日の授業でがんを見つけるのに「血液検査」「画像検査」「病理検査」があることを知りました。がんは生活習慣病なので予防することができるので、大人になったら日頃から検診や運動をするように心掛けたいです。
- ・がんという病気に対する認識が変わりました。今日の授業の内容を生かして、色々なことに気を配って生活していきたいと思います。とりあえず両親に検診をすすめてみようと思いました。
- ・事前学習では、つらいとか抽象的なことしか書けなかつたけど、講義を聞いて、普通に接するとか、治る可能性があるとか、具体的なことも分かり良かった。また、これからは周りの人が一緒に居られるというあたり前に感謝していきたいと思いました。
- ・がんについて知っているつもりでいたけど、人は“がん”と言われた時に5つの段階で気持ちに変化していくことが分かつたし、どのように接していけば良いか分かつたので、良かったです。

第一段階：否認
第二段階：怒り
第三段階：取引
第四段階：抑うつ
第五段階：受容

11月11日(水)

1年 誕生～人がもっている力の不思議～

【講師】 保健師 檜谷照子 様



「ついこのあいだまで抱っこされてミルクを飲んでいたらもう中学生になってしまった」、と言われたことのある生徒がいるかもしれません。1年生は、きっとおぼえていないその時期のことを学びました。

講師の先生からは、生まれたての赤ちゃんがもっている力を中心にお話をいただきました。三育学院大学看護学部と子ども家庭支援センターのご協力をいただいて、新生児と同じ大きさ、重さの赤ちゃん人形をお借りすることができました。「抱っこ体験」はコロナ禍の中でなかなかできない「ふれあい」の代わりに、少しはなったかもしれません。人形とはいえ、おそろおそろ首を支えて大事に抱える生徒はとてもやさしい表情をしていました。



＜生徒の振り返りから＞

・今まで赤ちゃんを直接見たことがなかったけれど、今回の授業で何となくイメージができたから、生で見るときもテンパらずに済みそう。赤ちゃんはとても重くてなかなか持ち上がらなかった。

・知ってるようで知らないこと、赤ちゃんがどのような力を持っているか知ることができた。自分を育ててくれた親はすごく大変だったんだと思った。

・日々を繰り返して大人になっていく赤ちゃんってすごいと思いました。赤ちゃんの1日には大きな成長があると思いました。クラスみんなや自分も赤ちゃんのときこういう感じだったと思うと「お～(すごい)」となります。

・生まれてきた赤ちゃんも育ててくれたお母さんも奇跡のようにすごいことだということが分かった。抱っこの経験では意外と重く難しかった。うまくできるようにになりたいと思った。

・赤ちゃんを抱いてみたとき、思ったより重くてしっかり生きているような感じがした。

・赤ちゃんはただ弱そうでもできないわけではなく、多くの力を持ち、未来へとつなぐ力があり、このような力があることは全然知らなかったの、今の私たちがいる理由がよくわかった。また、赤ちゃんの自然に動く筋肉のおかげで親と子の愛着が深くなっていくことも驚いた。

・衛生は「生きることや生活を守る」看護は「手と目を守る」という意味があることを初めて知りました。

・赤ちゃんはただ泣いて寝ているのだと思っていただけ、実は多くのすごい力を持っているのだと知った。私は味が赤ちゃんの時、ずっとずっと泣いてばかりで母をとられてばかりで、嫌で嫌いでどっかに行ってしまったらいいのと思っていました。けれど、今回赤ちゃんがどれだけ大切が分かりました。

＜ご参観いただいた保護者・CSの方のご感想から＞

- ・いのちの授業でこのようにいくつものテーマで中学生の時に考える機会があるのは大切だと思った。
- ・今後も、難しいテーマですがいのちの教育プログラムを続けてほしいと思います。
- ・生徒たちが真剣に聞いている様子に感心いたしました。
- ・1年生では、生徒が赤ちゃんを抱く体験をするとき、とても優しい顔になるのが印象的でした。
- ・赤ちゃんの能力、人による違い、学習による変容などについてのメッセージは大切だと思った。
- ・3年生では、提供者と希望者の立場になりながら意思表示を考えるのが大切と改めて思いました。
- ・ドナーの数の差が国・地域による違いの事情を知りたい。話し合いをしたいところでもあり、今後に生かしてほしいと思った。

【お知らせ】

★12月12日(土)の土曜授業では、午後、道徳授業の公開があります。道徳をご参観後、地域での子どもたちについて、意見交換を行います。保護者の方、CS、学校支援本部、地教推の方のみ、ご参加いただくことにしています。

★12月13日(日)、「杉並区中学校対抗駅伝大会」が開催されます。本校の駅伝チーム、朝練などでタイムを伸ばしてきました。開場での応援は選手の保護者と教員5名という制限がありますが、競技の様子はYouTube(RUNETchannel)で配信されます。